

## 演歌の歌詞における笑い表現の定量的評価

中村 亨, 小山謙二, 西尾修一  
NTT コミュニケーション科学研究所

円滑なコミュニケーションにとって重要な役割を果たすと考えられる「笑い」に注目し、様々な面からの分析を行っている。今回、大衆的、情緒的なメディアの代表例である歌謡曲を取り上げ、歌詞に含まれる笑いの記述(笑い表現)の調査、分析を行った。対象とした人気歌謡曲 1423 曲を、演歌系と POPS 系(演歌系以外)の歌謡曲に分類し、笑い表現の出現傾向の比較を行った。対象曲の歌詞から抜き出した各笑い表現を、快、不快、社交の3つの基本的な笑いの要素から構成されるものと考え、その割合をみた。さらに笑い手や語り手など人間関係、笑い手の気持ち、時制などを調べた。また、笑いと対照的な感情表現として泣きの記述についても出現傾向を調べた。

## Analysis of Laugh Expressions in Lyrics of “*Enka*”

Toru Nakamura, Kenji Koyama, Shuichi Nishio  
NTT Communication Science Laboratories

This paper reports an analysis of laughs expressed in lyrics of Japanese popular songs. Expressions describing laugh were extracted from lyrics of 1423 songs. Each song was classified as either “*Enka*” (a popular song with a traditional Japanese melody) or not. Differences in these two categories were investigated in various aspects. Each laugh expression was evaluated by the ratio of three fundamental components: laugh of pleasantness, unpleasantness and sociability. Furthermore, other attributes of laugh expressions, such as the human relations, the feeling of the person laughing, and the tense were also examined.

## 1.はじめに

笑いは種々の感情表出の中でも、円滑なコミュニケーションのための不可欠な役割を果たしている。また、日常生活の中で特に頻繁に見られる感情表出であり、メディアの感性的側面を特徴付ける重要なパラメタである。一方で、他の感情表出に比べて表出者の心理状態のバリエーションも豊富である。一般に広く受け入れられているメディアの中に、どんな笑いがどの程度含まれ、また、どのように表現されているのだろうか。

知性と感性は人間の情報処理機能の代表的な二つの側面である。「はじめに言葉(ロゴス)ありき」と聖ヨハネの福音書でも述べられているように、ロゴス=「言葉」とは「知性」または「理性」を意味していた。感性は主観的、多義的、状況依存的な性質を持っている。「感性情報」とは、知性と感性のオーバーラップした領域で、計測可能かつ知覚可能な精神活動の情報であると定義され、「感性」そのものより取り扱いやすい。コンピュータの扱う対象を知性(論理)の世界から、感性の世界へ広げることを狙い、感性情報処理の研究題材として、文字メディア(新聞、雑誌、歌詞など)における感性表現の代表例である笑いを取り上げる。以前に客観的な書き言葉のメディアの代表例として新聞記事を対象に笑いの表現の定量的評価を行ったが[1][2][3]、今回、大衆的、情緒的な話し言葉のメディアとして、歌謡曲の歌詞を取り上げた。特に、叙情的かつ日本特有の歌曲として親しまれている演歌にスポットを当て、その他の歌謡曲との比較を行った。従来に関連研究としては、歌謡曲歌詞の頻出単語の分析[4]や、歌詞に描かれる駅空間の情景描写の調査研究[5]、歌詞中の旅の記述に関する調査研究[6]、ニューミュージックの恋愛描写に関する研究[7]などが挙げられる。

対象とした各曲を演歌系またはPOPS系(演歌以外のもの)の二つのカテゴリに分類し、その歌詞に含まれる笑いの記述(笑い表現)の出現傾向の比較を行った。抜き出した各笑い表現について、快の笑い、不快の笑い、社交の笑いの3つの基本的な笑いの要素からどのように構成されているかをみた。さらに人間関係や、笑いの時制などについて判定し、集計、分析を行った。また、笑いと対照的な感情表出として泣

きの記述(泣き表現)の抽出を行い、笑い表現と併せて出現傾向をみた。

## 2.方法

### 2.1.対象曲

演歌は安定したファン層を持ち、大衆的かつ情緒的なメディアの代表例といえる。演歌の原義は明治初期の民権運動の演説を歌形式にしたものといわれるが[8]、のちに政治色は薄くなり、主に悲恋の人情を歌うようになり、“艶歌”や“怨歌”、“援歌”とも書かれるようになった[9]。1960年代以降のフォーク、ロック、ニューミュージック等の普及に伴って、それまで単に“流行歌”や“歌謡曲”と呼ばれていたものが“演歌”というジャンルとして分化した。現在の演歌は、ヨナ抜き(ファとシの音を抜いたもの)短音階を特徴とする歌謡曲を指すと考えるのが一般的である。また、実質的な原点は「船頭小唄」(1922年頃、作詞:野口雨情、作曲:中山晋平)とする人もいる。また岩波書店の広辞苑によると、演歌の定義は「現代歌謡曲の一種。哀調を帯びた日本のメロディーとこぶしのきいた唱法が特色。」となっており、小学館の大辞泉では「日本調流行歌の一。小節(こぶし)をかかせた浪曲風メロディーで二拍子、短調の曲が多く、義理人情を歌う」となっている。しかし現在ではニューミュージックに近い曲調の演歌が積極的に作られていることもあり、判断は難しい。これらをふまえ、ある曲が演歌であるかないかについては、歌詞のテーマや歌手などから総合的に判断されるものと考えた。たとえば、現在の典型的な演歌歌手としては、北島三郎、森進一、五木ひろし、石川さゆり、島倉千代子、都はるみなどが挙げられる。

本研究は、演歌の感性的な特徴をその他の歌謡曲との対比の上で見出すことが目的である。まず、大衆に広く親しまれ、愛聴、愛唱された曲を取り上げるため、下記の歌詞集やヒットチャート等に含まれる曲を調査の母集団とした。

- (1) 週間ヒットチャート(1968~1994)の1位曲 500曲(「ORICON No.1 HITS 500」, クラブハウス, 1994)
- (2) ロングセラーチャートの上位50位51曲(「オリコン」, 1988.2.15号)
- (3) 演歌歌詞集の掲載624曲(「演歌の心特選集」, 梧桐書院, 1994)

- (4) NHK 紅白歌合戦(1984~1995)の出場曲 538 曲  
 (5) 歌謡曲 CD 集の収録 201 曲(最新版ゴールデンヒット歌謡大全集, コロムビア・ファミリークラブ, 1996)

以上の総計 1538 曲について曲名, 歌手, 作曲家, 作曲家, 歌詞を調べた。またこれらの曲のうち, 洋楽(日本語歌詞でない曲)やヒット曲メドレー, 歌詞等のデータが入手できなかった曲を除外した。そのうえで, 各曲を(a)演歌系, (b)POPS系(フォーク, ロック等含む), (c)その他(童謡, 唱歌, クラシック歌曲等), の3つのカテゴリに分けた。このうち, (c)その他は分析対象から除外し, (a)演歌系(793 曲)及び(b)POPS系(630 曲)の曲合計 1423 曲を対象曲として分析を行った。

## 2.2. 笑い表現, 泣き表現の抽出

今回歌詞中の笑い表現を調べるにあたって, 笑いが明確に記述されている場合にのみ注目した。笑い表現の具体例としては, 「あの頃の笑顔を取り戻すまで」, 「そっと彼女が微笑んだ」の下線部のようなものが挙げられる。その他, 「笑う」, 「苦笑い」, 「笑み」などがある。「にこにこ」や「ニヤッ」などの表現も笑いを記述していると考えられるが, 今回の調査では結果的に該当例がなかった。また, 「うれしい」などの感情表現がある場合には, その登場人物の笑顔が連想出来ることも少なくないが, はっきりとした笑いの記述がない場合は対象外とした。

前述の対象曲 1423 曲全てについて, 歌詞中に含まれる笑いの記述(笑い表現)を抜き出した。この抽出した各笑い表現毎に, 次節で述べるいくつかの属性について調べ, 分析を行った。また, 笑い表現毎の集計(言葉として何が多く使われているかの集計)も行った。歌詞は文字で表されるが, 歌として聴く場合, 発音(読み)が重要であると考えられる。そこで漢字の表現の違いなどの作詞家の意図は無視し, 読みが同じで漢字が異なる場合は同じ表現として数えた。ただし, 動詞と名詞のように品詞が異なる場合は別の表現として数えた。

また, 笑いの対照的な感情表出の一例として「泣き」が挙げられる。特に歌謡曲の歌詞には泣きの記述が多い。そこで, 歌詞中の泣きの記述(泣き表現)にも注目し, 含まれる度数を曲毎

に調べた。泣き表現の例としては, 「泣く」, 「涙」などが挙げられるが, 「枕を濡らす」などの間接的に泣きを表す表現も数えた。

## 2.3. 笑い表現の属性

個々の笑いにおける状況を詳細に分析する場合, 誰が, 誰に向かって笑うのかなどの人間関係や, それら各個人の感情状態や意図など複雑な要因を考慮する必要がある。抽出した全ての笑い表現について, 人間関係, 笑い手の気持ち, 時制, 快, 不快, 社交の笑いなどの属性を調べた。具体的には, 前もって属性項目毎に設定した選択肢から適当なものを選択した。このとき, 笑い表現の箇所の前後の文脈についても十分考慮した。また, 必要に応じて曲題や歌手等も参考にした。

### 2.3.1. 笑いにおける人間関係

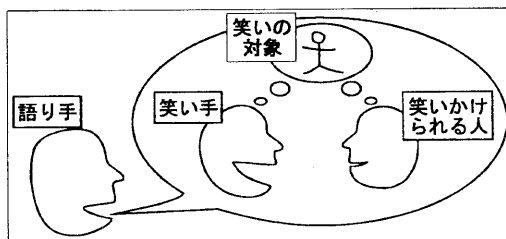


図1 笑いにおける人間関係

歌謡曲の歌詞では, 何らかの形で男女の恋愛関係が描かれていることがほとんどである。多くの場合, 主人公と考えられる男女が1名ずつ登場し, そのどちらか一方の語り口調である。このことを踏まえて, 各笑い表現について人間関係を把握するため, 次の4つの項目の判定を行った。

#### (1) 笑い手

笑う人。笑いの表出者

#### (2) 笑いかけられる人

笑い手が笑いを見せる相手。

#### (3) 笑いの対象

笑い手が嘲りの気持ちや滑稽さを感じる相手。笑い手がある人の言動を笑う場合, その人を笑い対象とする。動物など人でない場合もある。

#### (4) 語り手

笑いの記述の含まれる文脈を語る人。実際には歌手がこの語り手として歌うことになる。たとえば, 男性歌手が, 女性の口調の歌詞を唄う場合は語り手は女性とする。

各項目は次の選択肢から適切なものを選択した。(a)主人公の男、(b)主人公の女、(c)主人公の男女両方、(d)一般の人(人々)、(e)特定第三者(主人公の家族、友人など)、(f)無し、の6種類である。なお、笑い手及び語り手は必ず誰かいると考えられるため、(f)無しは選択しない。

### 2.3.2. 笑い手の気持ち

それぞれの笑いの場面で、笑い手が何を思っているのか、どのように感じているのかは重要な要素である。笑いには、笑い手が思わず笑ってしまう不随意的な笑い(意図的)と随意的(意図的)な笑いがある。随意的な笑いは道具的なものであり、笑い手が、自分を取り巻く社会的関係に何らかの影響を与えることを期待していると考えられる。つまり、不随意的な笑いを真似ることによって、笑い手が自身の嬉しさや楽しさを演じていたり、状況の深刻さを打ち消したりしていると考えられる。しかし、笑いは非常に頻繁に使用されるコミュニケーションツールであり、状況に応じた習慣的で無意識的な使用も多くみられる。そのため、随意、不随意の区別は一般に難しい。そこで、それぞれの笑いについて、随意、不随意を問わず、笑い手の笑う際の感情や思惑などを下記の8種類に分けて選択する。

なお、複数の感情が入り交じった場合など、選択肢一つで説明できない状況の場合、主選択、副選択と二つ選ぶことにした。

#### (a) おかしい

何かを見たり聞いたりしておかしさを感じているような場合。例:「ジョーク飛ばして笑わせて」

#### (b) 嬉しい/楽しい

何かの出来事を嬉しく感じたり、楽しい気分であるような場合。もしくは幸福の象徴としての笑い。例:「今日まで二人泣いたり笑ったり」

#### (c) 良く思われたい

笑い手が、「笑いかけられる人」に自分のことを良く思われたい場合や、その場の雰囲気や良好に保ちたいと考えているような場合。愛想で笑うような場合に多い。例:「作り笑い浮かべ」

#### (d) 困惑している

笑い手が不快や動揺などを感じている場合。例:「沈む自分に沈む自分に なが笑い」

#### (e) 馬鹿にしている

誰かを馬鹿にしている、さげすんでいるような場合。例:「古い女と笑われようと」

#### (f) 好意を持っている

笑い手が笑いかけられる人に好意や愛情を持っていて、そのことを笑うことで笑いかけられる人に伝えたり、励ますような場合。例:「寒くないかと聞いてくれた笑顔が」

#### (g) 本心を隠したい

笑い手が、笑うことで意図的に気持ちをごまかしたり、隠したりしようとしているような場合。例:「お酒の席のことだから笑ってごまかせるわ私」、「悲しみこらえて微笑むよりも」

#### (h) 特に何もない

笑うことに関連して特に何も感じていなかったり、考えていない場合。

本項目については、主選択のみの場合は1点、副選択もある場合は主選択に2/3点、副選択に1/3点を配点して集計した。

### 2.3.3. 笑いの時制

笑いが記述されている場合で、その笑いが過去の経験や未来の仮定の笑いであることも少なくない。各笑い表現の表す笑いの発生時期を以下の3つの中から一つ選択した。

■**過去** その笑いが、過ぎ去った昔の記憶や思い出の中だけのものである場合。現在はもう無い場合。

■**現在** その笑いが、当該文脈において現在実行されているか、日常的に起こる場合。または近く実現しそうな場合や、実行は容易だが単に実現していないだけの場合。

■**未来(及び仮定)** その笑いが、現時点で実行されていない場合で、仮定や希望、夢の中のものである場合。その笑いが客観的にみて実現するかどうかも不明である場合。過去の仮定も含む。

たとえば、「あの頃の笑顔」や「いつか笑える日がくるさ」などの歌詞では、それぞれ「あの頃の」、「いつか」などの部分からそれぞれ「過去」、「未来」と判定されるが、一般に時期を特定する記述が無い場合、歌詞全体から判断した。

### 2.3.4. 快、不快、社交の笑い

笑いは感情表出の一種であるが、結びつく感情は様々であるし、意図的に作って表出されるこ

とも多い。基本的にはポジティブな感情に結びつくものと考えられるが、特に社会的な意味が付加された笑いでは、軽蔑の意思を表したり、へりくだった合図として使われるなど、社会的な攻撃性や防御性を伴った道具としても使われている。我々は日常生活において、これらの笑いをその場の状況などから経験的に判別し、表出者の心理状態を判断する手がかりにしている[10]。従来の笑いの研究では、喜劇におけるおかしさの笑い(滑稽、ユーモア、ウィットなど)のように特定の種類の笑いについて、その発生の仕組みについて深く考察したもの[11]が多いが、ここで取り上げるようなメディアの全体像の分析には適当ではない。また、日常的にみられる笑いは、発生の原因等の状況が複雑であることが多く、各個が独立した種類に分類することは困難である。そこで、本研究では、笑いには基本的な3つの構成要素があると考えた。各々について簡単に触れる。

#### (1) 快の笑い

充足感を伴った喜びの笑いやおかしさの笑い。幸福感の象徴としてもしばしば使われる。例:「合格の知らせを聞いて満面に笑みを浮かべた」

#### (2) 不快の笑い

失望などの不快感や、困惑を伴う笑い。例:「課長は部下の下らない意見を一笑に付した」

#### (3) 社交の笑い

相手に対して伝えることを意図した笑い。“作る”笑いがこれに当たる。感情的に中性である挨拶の際の笑いや、愛想で見せる笑いなどが含まれる。例:「得意先の下らない冗談に笑顔で相づちを打った」

これらは、笑いが起こっている状況を客観的にみた場合の感情的評価を基準にしている。我々の周りに普通にみられる笑いは、この三つの笑いの要素から構成されていると考えることが出来る(ただし、くすぐりや病的な原因による笑いは含まれない)。そこで、各笑い表現毎に、快、不快、社交の三つの笑いの要素それぞれについて、2点(その笑い表現の主成分である)、1点(その成分が少しある:副成分)、0点(その成分はなし)の3段階の採点を行った。ただし各笑い表現について、主成分単独、主成分と副成分

一つ、主成分と副成分二つ、の三通りの選択を許した。本項目については快、不快、社交の点数の合計が1.0点になるように正規化してから集計を行った。

## 2.4. 評価者

2.3.で述べた笑い表現の属性の評価は、男性(20代)、女性(30代)の計2名が行った。人間関係や時制についての評価結果は、評価者2名間でほとんど一致していた。また、笑い手の気持ちや快、不快、社交の笑いの評価については、大多数の例では一致していたが、歌詞の中で状況の記述が曖昧、もしくは不十分な場合には、評価者の主観で意見が分かれる場合もあった。このような場合、両名で議論の上で決定したが、それでも決まらない際には、他に40代男性1名、20代男性2名の意見を参考にして多数決で決定した。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 笑い表現、泣き表現の有無

笑い表現、泣き表現の1曲あたりの平均個数は、演歌系でそれぞれ0.22、1.31であり、POPS系で0.44、0.96である。演歌系はPOPS系に比べて笑い表現は約半分であり、泣き表現は約1.4倍と多い。また、全対象曲について笑い表現、泣き表現の有無をみると、全体傾向としては、演歌系の曲はPOPS系の曲に比べて、笑い表現、泣き表現の少なくとも一方が含まれている割合が高い(演歌系74%、POPS系60%)。演歌系では泣き表現が69%の曲に含まれているが、笑い表現は18%と少ない。一方、POPS系では、笑い表現の含まれる割合は29%と比較的高い。

### 3.2. 笑いの表現

抽出した各笑い表現について、表現(使用されていることば)毎に度数をみると、演歌系、POPS系共に、「笑う」(演歌系42%、POPS系39%)や「笑顔」(同32%、23%)、「微笑む」(同9%、15%)、「微笑み」(同6%、19%)という広いニュアンスを持った表現の度数が多く、この4つで9割前後を占めている。演歌系はPOPS系と比べ、「笑顔」が多く、「微笑み」、「微笑む」は少ない。新聞記事に比較的多くみられる名詞形の「笑い」はほとんど見られなかった。また、「苦笑い」や「作り笑い」などの、笑いを直接形容する語が付く笑い表現がほとんどみられ

なかった。これらの「～笑い」といった表現は、笑いを特定の意味に限定しがちである。歌詞ではこのような限定的な表現よりも、抽象的で曖昧ではあるが、深みのある「笑う」や「微笑む」といった表現が好まれると考えられる。

### 3.3. 快, 不快, 社交の笑いの出現傾向

2.3.4.で述べた評価点を集計した結果から得られた快, 不快, 社交の笑いの出現比率を図2に示す。演歌系, POPS系とも快の笑いが多い。POPS系に比べて、演歌系の方が、社交の笑いが多く、快の笑いが少ないのが特徴的である。

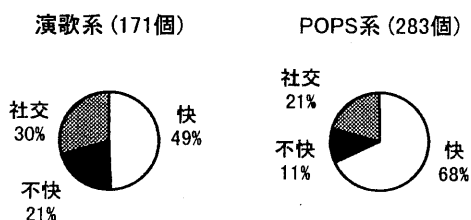


図2 快, 不快, 社交の出現割合

各笑い表現には、快, 不快, 社交のどれか一つの主成分のみで説明できるものとそうでないものがある。副成分もある方が主成分のみの場合に比べて、その場の状況や笑い手の感情がより複雑であると考えられる。演歌系, POPS系共に、快の笑いが主成分の笑いの場合、主成分単独であることが多い(85%以上)一方で、社交の笑いが主成分の場合、単独である割合は50%以下と少ない。これは、歌詞に含まれる笑いには、感情的に中性な挨拶などの笑いは少なく、複雑な感情を伴うことが多いためと考えられる。また、演歌系と POPS系を比較すると、全体的に若干演歌系の方が主成分単独である割合が小さい。

### 3.4. 笑い手の気持ち

2.3.2.で述べた点を集計し、笑い手の気持ちの種類毎に比率をみると、演歌系, POPS系共に“嬉しい/楽しい”がそれぞれ28%, 44%と最多である。次いで、“本心を隠したい”(演歌系23%, POPS系15%)や“好意を持っている”(同19%, 17%), “馬鹿にしている”(同13%, 6%)などが多い。“嬉しい/楽しい”はPOPS系の方が多く、 “馬鹿にしている”や“本心を隠したい”は演歌系の方が多い。

さらに、笑い手の種別毎にみると、主人公の男または女が笑い手の場合、演歌系, POPS系共に、“嬉しい/楽しい”, “好意を持っている”, “本心を隠したい”などが多い。“嬉しい/楽しい”についてみると、演歌系では、男が笑い手の場合(37%)の方が、女が笑い手の場合(20%)に比べて多い。ところが逆に POPS系では、男が笑い手の場合(28%)の方が、女が笑い手の場合(50%)に比べて多い。“本心を隠したい”については、両系共に女が笑い手の場合の方が多い。

また、男女が笑い手の場合(一つの笑い表現で主人公の男女が共に笑っている場合)、両系共に“嬉しい/楽しい”が半数以上と多い。POPS系には“おかしい”や“本心を隠したい”は含まれていないが、演歌系には共に10%強含まれているのが特徴的である。

また、快, 不快, 社交の笑いそれぞれについて、笑い手の気持ちの比率をみると、快の笑いでは“嬉しい/楽しい”(演歌系52%, POPS系63%), “好意を持っている”(同29%, 22%)が両系共に多く、演歌系では“おかしい”(11%)も比較的多い。不快の笑いでは、“馬鹿にしている”(演歌系57%, POPS系49%), “本心を隠したい”(同21%, 19%)が両系共に多く、POPS系では“困惑している”(15%), “おかしい”(11%)なども多い。社交の笑いでは“本心を隠したい”(演歌系57%, POPS系53%)が両系共に多く、次いで、演歌系では“好意を持っている”(13%), POPS系では“良く思われたい”(16%)が多い。これらの傾向は演歌系と POPS系でほぼ同じである。

### 3.5. 笑い表現の時制

各笑い表現の時制について、“現在”の笑いの比率(現在比)をみることで、当該文脈の時点において実際に笑いがあるのかどうか分かる(図3)。快の笑いの現在比は演歌系(45%)が POPS系(67%)に比べて低い。不快及び社交の笑いの現在比は、演歌系(80%強)が POPS系(75%前後)に比べて若干高い。全体的にみて、特に演歌系の快の笑いの現在比が低い。快の笑いにおける現在比は、幸福や楽しさの表現としての笑い表現が、現状を記述したものであるかどうかの目安となると考えられる。このことから、演歌系における幸福の多くが、思い出(過去の事象)や希望(未来の事象)として表現されていることがわかる。演歌系における笑いの表

現は、現在の悲しい情景をより際立たせているものと考えられる。

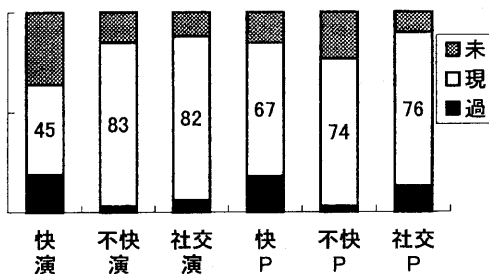


図3 快、不快、社交の笑いの時制(%)

また、過去と未来を比較すると、全体的に過去の笑いが少ない。特に、不快の笑いは演歌系、POPS系いづれも3%と少ない。快の笑いについてみると、POPS系では“過去”(18%)の方が“未来”(15%)より若干多い一方で、演歌系では“未来”(36%)が“過去”(19%)の倍近くと多い。これは、「現在まではあまり幸福でなかった」という点で一般的な共感を誘い、「未来に対する希望」で聴衆を引きつける効果をもつと考えられる。

### 3.6.笑いの人間関係

前述の通り、ほとんどの曲が特定の男女の恋愛を主題とする曲であるため、以下主人公の男と女に焦点を当てて考察する。以下単に男、女という場合は主人公の男、女を指すものとする。

#### 3.6.1.笑い手

笑い手の種類毎の出現比率をみると、女が笑い手の場合(演歌系42%、POPS系54%)の方が男が笑い手の場合(同27%、28%)よりも多い。男女両方が笑い手の場合を含めると演歌系で54%、POPS系で63%と全体の過半数で女が笑っていることがわかる。「女は愛嬌、男は度胸」の表れだろうか。また、男または女が笑い手の場合の快、不快、社交の笑いの出現比率をみると、POPS系の場合、男女間で差はあまりないが、演歌系では女が笑い手の場合、社交の笑いが46%と多くを占めているのが特徴的である。このことは演歌系の場合、女性が苦労を隠して男に献身的であるという状況設定が多いことと関係していると考えられる。

#### 3.6.2.語り手と笑い手

笑いのある対象曲では、90%以上が語り手は主人公の男か女である。この場合に語られる笑い

が、語り手自身が笑い手であるか、もう一人の主人公の異性(相手)が笑い手であるかをみると、POPS系では、相手(48%)に比べて語り手自身(30%)は少ない。一方演歌系の場合、語り手自身(37%)が相手(29%)より多い。演歌系では、「いつかは笑える日が」や「笑い話になる」などの表現が多く、結果的に自身の笑いを語るが多くなると考えられる。

さらに、語り手自身の笑い、相手の笑いの場合について快、不快、社交の笑いの出現比率を比較すると、POPS系で相手が笑い手である場合に、快の笑いが76%を占めているのが特徴的である(語り手自身では50%)。POPS系では、笑い手の気持ちが“嬉しい/楽しい”が半数以上であることを勘案すると、相手の笑いが単純に相手の楽しさや嬉しさを表すことが多いと考えられる。一方、演歌系の場合、語り手自身と相手の笑いに差はほとんどない。

#### 3.6.3.笑い手と笑いかける人

コミュニケーションとして笑いをみる場合、笑い手と笑いかける人の関係が重要である。主人公の男女間の笑い(男から女への笑い、女から男への笑い、男女相互の笑いの三種類の合計)と、その他(男女間以外)の笑いで快、不快、社交の笑いの出現比率を比較すると、POPS系の曲における男女間の笑いは快が72%を占め、その他の笑いの場合の64%に比べて多い。演歌系では逆に男女間(47%)の方がその他(51%)に比べて快の笑いが少なく、社交の笑いが比較的多い。

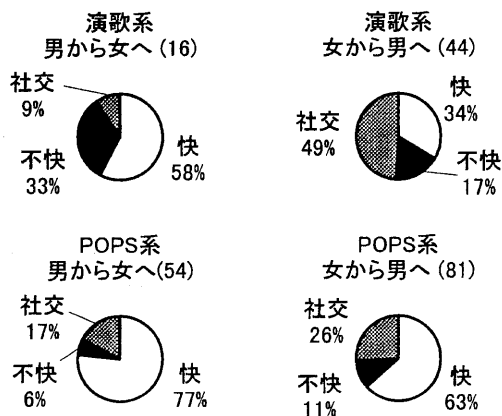


図4 男から女への笑い(16)と女から男への笑い(44)

また、男から女への笑いと女から男への笑いを比較すると(図4)、演歌系で、男から女の社交の笑いが9%であるのに比べ、女から男の場合には49%と多いのが特徴的である。また、POPS系では女から男への笑いの方が不快の笑いが多い。

### 3.6.4. 笑いの対象

笑い手の気持ちに嘲りやおかしさがある場合のみ、笑いの対象があると判断される。そのため、笑いの対象がないのは、演歌系75%、POPS系で86%と非常に高率である。このように笑いの対象の例数は少ないが、主人公の男と女で比較すると、演歌系、POPS系共に男が笑いの対象になること(演歌系14%、POPS系8%)が女(同9%、4%)に比べて多いことがわかる。

### 3.7. 作詞家による傾向

調査対象曲1423曲の中で、6曲以上を作詞した売れっ子作詞家56人(合計902曲)を対象に、演歌率(演歌系の曲の比率)80%以上を演歌系作詞家、20%以下をPOPS系作詞家として分類すると、演歌系作詞家は28名、POPS系作詞家は22名、残り6名であり、極端に演歌系とPOPS系に分かれる。演歌系の代表的作詞家は、たかたかし、吉岡治、星野哲郎、荒木とよひさなどであり、POPS系には、秋元康、松本隆、売野雅男などがいる。笑い表現、泣き表現の使用率(使用曲数/作詞曲数)と、演歌率の相関係数をみると、演歌率の高い作詞家ほど笑い表現の使用率が低く、泣き表現の使用率が高いことがわかる。特に、泣き表現のうちで「泣く」(活用形も含む)という表現との相関が強い。すべての作詞家は必ず泣き表現をいずれかの曲に盛り込んでいる。すべての曲に泣き表現を必ず盛り込んでいる作詞家は、大津あきら、荒川利夫、高見沢俊彦である。一方、笑い表現を全く用いない作詞家として、里村龍一、池田充男、遠藤実、藤田まさなどがいる。笑い表現の使用率の高い作詞家には、藤井郁弥(83%)、吉田美和(71%)、さだまさし(71%)、稲葉浩志(50%)、高見沢俊彦(50%)、小椋佳(50%)がいる。

曲数最多の阿久悠の作詞曲66曲の中には、北の宿から(歌手: 都はるみ, 作曲: 小林亜星)、津軽海峡冬景色(歌手: 石川さゆり, 作曲: 三木たかし)、居酒屋(歌手: 五木ひろし, 作曲: 大野克夫)、舟唄(歌手: 八代亜紀, 作曲: 浜圭介)などの演歌の代表曲から、ピンクレディーが唄い、都倉俊

一が作曲した一連のPOPS系ミリオンセラー(UFO, モンスター、渚のシンドバッド、サウスボー、SOS、ウォンテッド)まで実に幅広い。一時代を画した大作詞家阿久悠の演歌率が56%である事実は、我々日本人が演歌を好む割合が約6割と言えるかもしれない。彼の作詞した曲の中で、笑い表現の使用率が18%、泣き表現の使用率が50%である。

また、作詞家全員について前述の基準で、演歌系作詞家、POPS系作詞家に分類すると、1人当たりの平均作詞曲数はそれぞれ、3.9、2.4であり、演歌系の方が1.5曲多い。

## 参考文献

- [1] 小山, 中村, 西尾: 笑いの原因の事例分析, 感情心理学研究, Vol.3, No.1, pp.38 (1995)
- [2] 西尾, 中村, 小山: 新聞記事における「笑い」の分析, 日本人間工学会関西支部大会講演論文集, pp.41-44 (1995)
- [3] 西尾, 小山, 中村: 新聞記事における笑い表現の定量的評価, 情報処理学会研究報告人文科学とコンピュータ, Vol. 31, (1996)
- [4] 水谷静夫: 「泣く・花・恋い」から「……ている・泣く・雨」へ, 言語生活, 4月号, pp.26-37(1959)
- [5] 島見伸次, 仲間浩一, 岡田昌彰: 歌謡曲の情景描写からみた駅空間のイメージに関する基礎的研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol.29, pp.589-594 (1994)
- [6] 久保正敏: 歌謡曲の歌詞に見る旅, 国立民族学博物館研究報告, Vol.15, No.4, pp.943-986 (1991)
- [7] 久保正敏: ニューミュージックに見る恋愛風景, 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会, 25-6, pp.49-57 (1995)
- [8] 古茂田信男, 島田芳文, 矢沢寛, 横沢千秋: 新版日本流行歌史(全3巻), 社会思想社, (1994)
- [9] 五木寛之: 艶歌と援歌と怨歌(初出『ゴキブリの歌』, 1970), 日本の名随筆50『歌』(加藤登紀子編), 作品社, (1994)
- [10] 志水彰, 角辻豊, 中村真: 人はなぜ笑うのか, 講談社, (1994)
- [11] ベルクソン, 林達夫訳: 笑い, 岩波文庫 (1938)